

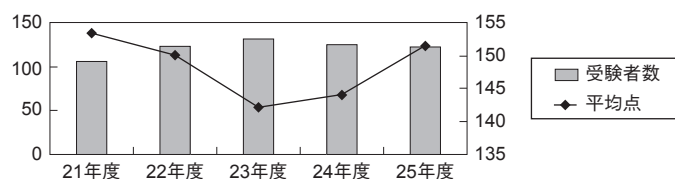
ド イ ツ 語

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成25年度も大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）の「ドイツ語」が実施され、123名（昨年度比－2名）が受験し、平均点151.54点（昨年比＋7.4点）となった。

「英語」と「ドイツ語」のセンター試験は、問題の難易度、あるいは平均点が度々比較対象となることがある。しかし、50万人以上が受験する「英語」と130名前後の「ドイツ語」を単純に比較することにはあまり意味がないと考える。母集団数に明らかな差がある上に、必修科目である英語のみを学んでいる受験者と、必修の英語に加えてドイツ語を学んだ上でセンター試験を受験する者では、置かれている状況が違うものと考えからである。ここでは15歳前後になって初めてドイツ語に触れ、一定期間継続して学習してきた受験者にとって適切なセンター試験「ドイツ語」であるかということを検討したい。



受験者数は、昨年度と比較すると2名減っており平成22年度センター試験とほぼ同じ水準になった。

ここ数年で述べてきた、平均点が前年度を上回ると受験者が増加するという相関関係は見られなかった。過去5年の平均点と受験者の関係を見ると、受験者数が過去5年の中で少ない平成21年度や今年度は平均点150点前後の比較的高い水準となっている。過去5年の受験者数から予想すると、新高等学校学習指導要領を基に学んだ受験者がセンター試験を受験するまでは大きな増減はなく、110～130名程度の受験者数で推移していくのではないかと考えている。また、以前のような相関関係が見られなくなり受験者数に大きな増減がないということは、センター試験「ドイツ語」の難易度が年ごとに大きく上下することがなくなり比較的安定していることも要因となっているだろう。平成20年度以降のセンター試験「ドイツ語」の問題は、レベルに大きな差はなく、着実に学習を重ねた者が得点できる問題構成であり、受験者が「ドイツ語」を受験する際にイメージを描きやすい問題となっている。

しかし新高等学校学習指導要領が導入された後に、理数教科における必修単位数・科目数の増加や、英語科目に関する改訂によりドイツ語を含む英語以外の外国語の授業時間数確保が厳しくなることも予想され、受験者数に何らかの増減があるかもしれない。高等学校においてドイツ語を担当する教員としては、英語に加えてもう一つ別の外国語を学ぶことの意義は大きいと考えている。そしてその学習を更に発展させ「ドイツ語」での受験に挑戦しようと意欲的に学んでいる者の目標として「ドイツ語」がセンター入試の科目として存在することの意義は依然として大きいと考えている。

2 試験問題の内容・範囲等

過去数年間と比較しても、総合的によく考えられた問題であったと評価したい。会話文を用いた問題の作り方や単語の選択において、従来型の文法力・読解力を中心に測る問題に加え、コミュニケーション指向の教材で学習してきた受験者にもなじみやすい、会話の流れの中で反射的に使われるような表現を問う問題も加わって、問題のバリエーションが増えてきた印象を持った。詳細は以下に述べるが、単語・熟語・慣用句の選択、文章の難易度などもおおむね適切であると思う。

第1問 第1問は過去何年にもわたって、1)つづりと読み方、母音の長短、アクセントの位置といった単語の音韻についての問題、2)名詞の複数形、強変化動詞の三人称単数現在や過去基本形、過去分詞における母音の変化など、単語の語形変化についての問題、3)その他、動詞のsein支配、haben支配、過去分詞の前つづりgeの有無、語群の中から意味分野の異なるものを選ぶ問題という三つのカテゴリーから出題されている。カテゴリーごとの問題数や問題の配列はやや異なっており、今回は特に、しばらくの間2題出題されていたつづりと読み方の問題が1題となっていること、また、昨年、一昨年にはつけられていたA、B、Cの区切りがなくなっていることが特徴と言える。出題されている単語は基礎語彙でまとめられている。

問1 s及びßの読み方。無声音か有声音かを判断する、基本的な問題。

問2 子音字1つの前は長母音、二つ以上の前は短母音というつづりと読み方の規則性についての問題。Mädchenは規則の点からは一見外れて見えるが、そもそも比較的初期段階で学ぶ基本的な単語である。一方Märzも-ärのつづりから長母音と見なしてしまう可能性はあるが、これも単語として基礎レベルであるので読み方・つづり・意味を正確に覚えておくべきものである。

問3 第一アクセントの位置を問う問題ではあるが、分離・非分離動詞の学習の際に習得している前つづりの知識によっても解ける問題である。ここでの単語の選択も適切である。

問4 名詞の文法上の性を答える問題。つづりから名詞の性を判断することは、一部必ずそうなるもの(-ung、-keit、-heit、-tionなど)に限定して教えている。むしろ性は名詞の特性の一つとして、つづりや読み方、意味などと同時に記憶するように指導している。その意味で、この種の問題では単語の選択に良否がかかっている。闇雲な単語の羅列ではなく、服飾を表す単語にまとめられており、好感が持てる。単語を分野で関連付けて覚えてほしいという意図もくみ取れる。

問5 複数形語尾の問題。-sを語尾につけて複数形とする名詞は、外来語系に多く存在している。その種の名詞はつづりや読み方からも系統が分かりやすいため、複数形を問われているという意識がなくても正答のFernseherを選ぶことができってしまうことも考えられる。

問6 強変化動詞の現在人称変化における母音の問題。選択肢中に強変化動詞は一つのみなので比較的答えやすい問題と思われる。

問7 強変化動詞の過去分詞の母音の問題。選択肢が全て強変化動詞で、かつ過去分詞までしっかりと覚えておいてもらいたい重要な動詞ばかりである。中ではtretenがやや難しいと思われるが、正答のsprechenが基本語彙なので問題はない。

問8 今回約10年ぶりに出題された単語の意味分野を判断する問題。問4でも触れたように、

コミュニケーション指向の教材では、章ごとに一定のテーマが与えられていて（例えば Wohnen とか Körper und Gesundheit など）、学習者はカテゴリーを同じくする単語を多数同時に学ぶことが多い。出題されている単語のレベルは適切である。

第2問 特徴的だと思われるのは、10題のうち人称代名詞、所有冠詞についての出題2題がどちらも女性形で、同型の ihr が扱われていることである。女性形は男性、中性と比べると学習者にとってはやや区別しにくいものである。この問題に限らず、今年度は問題文中に女性の名前が過年度より多く出されていたり、女性を指す語句が正答となる問題が多い印象を受けた。

問1 schicken が3・4格の目的語を取ることは基本的な事柄である。問題文の難易度もさほど高くないにもかかわらず女性の人称代名詞が正答であったため、難しく感じた受験者もいたようだ。

問2 wie と副詞、形容詞を組み合わせた疑問詞の問題。単独の疑問詞よりはやや難易度が高いと思われるが、日常会話ではしばしば使われる表現ばかりであり、コミュニケーション指向の教材で学んだ受験者にとっては容易な設問であったかもしれない。動詞 dauern の意味から、wie lange は自然と選ぶことができる。

問3 比較級は正答の lieber のみなので、als との関連から判断できるが、そもそも gern や lieber は会話的な教材では頻繁に目にする表現である。

問4 前置詞の意味がわかれば容易に解ける問題ではあるが、ある程度学習の進んだ者にとっては、ohne～zu のような不定詞句を扱う問題に見えたかもしれない。従来よく見られた、前置詞の支配格を問う問題ではないことが特徴である。

問5 第2問では比較的難易度が高かった問題。女性の所有冠詞 ihr の正しい語尾を答えなければならぬのだが、ihr は所有冠詞の中では mein、dein、sein と異なり、不定冠詞 ein とのつづりの類似性が少ないため、使いにくさを感じる傾向があるようだ。とはいえ、基礎的な文法知識が問われた良問である。

問6 in die U-Bahn から umsteigen は比較的容易に選べると思う。選択肢はどれも日常生活に密着した表現であり、それぞれ動作の具体的なイメージとともにして定着していることが求められる動詞である。

問7 「～しよう」という促しの表現として Wollen wir... ? は最も一般的な表現である。

問題文の内容もこの表現の例として妥当なものである。

問8 nicht nur A, sondern auch B は相関的接続詞として基本的な表現。

問9 möchte が助動詞であることが分かれば容易な問題だが、gern が入ることで hätte gern という表現と混同する可能性もあるかもしれない。

問10 主文と副文の間の時間差に気付けば、接続詞 nachdem の基本的用法であることが分かるはず。文法の学習では過去形の主文と過去完了の副文の組合せで登場するのが典型的であったが、本問では現在と現在完了の組合せになっているため、分かりやすい問題となった。

第3問 1題につき2か所の単語の位置を答え、両方正解の場合のみ得点という採点方式である。

毎回指摘していることだが、2か所の空欄に入る単語同士に相互に位置を規定する相関関係

がある場合はこのような採点方式もうなずけるのだが、今年も問2の1題が、片方のみ正解の可能性があり得るので、その点を指摘したい。ただ問2も含めて、全体的には語順の勘所を押さえた良い問題であったと思う。

問1 das Hausを先行詞とする副文の語順を問う問題。関係代名詞に先行する前置詞、現在完了時制であることなど、やや難度が高く感じられるが良問である。

問2 前半部で助動詞を用いた否定文中のnichtの位置、後半部はweilに導かれる副文の接続詞と定動詞以外のものの位置が問われている。それぞれ他の空欄に入るべきものが明白なので問題としては良質なのだが、どちらか一方を間違えた場合、他の3題と同様に扱うのは疑問がある。

問3 受動態の現在完了の文で、完了の助動詞と受動態の過去分詞の位置を判断する問題。構造的に複雑なためやや難度が高いと思われるが、語順についての正確な知識を問う問題としては良問。

問4 再帰動詞と話法の助動詞を組み合わせているのでやや複雑になっているが、これも正しい語順についての知識を問う問題としては質が高いと思う。

第4問 会話の長さや設問の数によってA、B、Cの3段階に区分されている点は過去数年間変わっていない。

A 日常会話で反射的に発することが求められる決まり文句を選ぶ問題が2題と、会話の内容と選択肢をよく読み、内容を理解すると答えが論理的に分かるタイプの問題が2題選ばれている。同じ形式の問題でも狙い所を変えることは受験者の学力を測る方法として適切であると考ええる。

I 問1 電車の中で援助を申し出てくれた人へ応対。お礼の言葉が返せるかどうか。他の選択肢もそれぞれ使うタイミングを理解していることが必要な表現ばかりである。

II 問2 電話での会話で、話し相手の名前のつづりが分からない場合の尋ね方を選ぶ問題。Herr Barthが何を聞き取れなかったのかは簡単に分かると思われるが、ドイツ人の電話の習慣を考えると、この会話にはHerr Barthが「Barth」と名乗る部分が抜け落ちているので場面が想像しにくかったかもしれない。正答のWie schreibtman das?に関して、電話という口頭のコミュニケーションとschreibenという動詞との間に違和感を感じsprechenやlesenとの選択を迷った受験者がいたかもしれない。

III 問3 誕生日を迎えた人へのお祝いの言葉。選択肢の挨拶はどれも日常生活で用いるドイツ語表現としてまず最初に知っておくべきもののばかりである。

IV 問4 家族間の日常会話だが、反射的な応答というよりもむしろ、会話の内容を読解して論理的に考えると正答にたどり着けるタイプの問題であると考ええる。例えば三つめのMonikaの台詞がなければ、②も正答として有効となる。最終的な判断は会話文を最後まで読まないとならなくなっているという点で工夫された良い問題である。

B ドイツ語の試験問題で扱われる会話としては珍しい、若い男女のちょっとしたいさかいを扱った会話である。腹を立てているAnnaと戸惑っている（あるいはとぼけている）Timという関係が読み取れるかどうか。ただし後述するが、問2の問題文からAnnaが不機嫌であるということは分かる。

問1 31に入るTimの台詞を前後から推測する。直前のschlechte Launeという表現は問2の問題文に意味が書かれているが、これと、31の次のAnnaの台詞からこのTimの言葉がAnnaを更に怒らせていることが分かる。一方、選択肢でもin Ordnung seinといった熟語を理解していなければならぬので、全体をしっかりと読んで理解しなければ解けない問題である。正答以外の選択肢は具体的な内容を尋ねる疑問文なので、一番Annaの気持ちをくみ取ることができていない③が正答となる。

問2 問題文にAnnaが不機嫌であると書いてあるので、問1の解答を見つけるヒントにもなっている。選択肢の内容はそれぞれ明解で、会話文からもTimが待ち合わせの時間に来なかったことは事実であると分かるため、これらの選択肢からは②以外を選ぶ要素はない。ただし、Annaが不機嫌になった根本的な原因は別のことだろうと想像がつく。

C 昨年などと比べると、会話が専門家へのインタビューであり、受験者が理解すべきなのは会話の流れやその場の雰囲気ではなく、登場する専門家が語っている言葉の内容であり、いわゆる読解問題として捉えれば、テーマ、語彙ともに適切な質を持った良問である。ただ、設問の内容については、二つのグラフの情報を総合しなければ答えられないような問いではなく、発言内容を図示したものはどれかを選ばせる問題にとどまっていた。

問1 2番目のDr. Bennの言葉、"Nein. Die Deutschen essen..."からの一節に答えが明確に示されている。

問2 最後から2番目のDr. Bennの言葉の中の、"Alte Leute essen fast doppelt so viel Obst wie junge Leute, aber sie trinken viel weniger Milch."が理解できれば答えられる。

問3 下線部の熟語、mit etw nicht zu tun habenは頻出の熟語といってよい。意味も知っていてしかるべきである。しかし選択肢がドイツ語であるために、より高度なドイツ語能力が求められている。良問である。

第5問 例年どおり、長めの会話文とそれに対する幾つかの設問から構成された問題である。今年も友達同士の会話で、犬を飼うことが話題となっている。不定代名詞einen、vor etw Angst haben、接続法第二式など比較的高度な文法事項があるものの、話しているテーマは身近なもので、登場人物それぞれの立場、考え方を含め、話の流れを大づかみに理解するのはさほど難しくはないと思われる。会話の中で理由付けをする発言が多く見られ、いかにもドイツ人らしい会話であるという印象を受けた。設問が全てドイツ語である点、及び後述する問3についての問題点のせいか、例年に比べてハードルの高い問題となったようだ。

問1 下線部のdagegenのda-が何を指しているかを読み取ることがポイント。下線部⑥までの3行で、Evaは犬を飼いたいんだけどもそれができないのだ、という状況が読み取れるかどうか。選択肢については②と③が内容的につながるように思われるが、②についての言及がないことから③が正答であることが判断できる。

問2 Lotteが「Evaの母親のいうことにも一理ある」と考えていることが分かるかどうか、及び、正答の選択肢で用いられているrecht habenという表現を知っているかどうか。以上の二つのハードルがあるやや難しい問題である。

問3 今回、と同時に近年の出題の中でも、正答に達した受験者が極端に少なかった問題である。問題文、選択肢ともにドイツ語のレベルは適切であったにもかかわらず、受験者がここ

まで苦勞した原因について想像してみると、本文中で問題が設定されている場所、及び選択肢の作り方双方にかなり高いハードルが設定されているということであったのだろうか。受験者の問題に対する取り組み方から予想するに、選択肢中のda-の指しているものが、die paar Schritte bis zum Park zu gehenだと取れず、Du hast以下の文全体だと思い、かつ会話を日本語に訳してから意味を取っていくと、④以外の選択肢が全て当てはまるように思われたのかもしれない。いずれにしても、da-の指すものを正確に把握することは受験者の大部分を占めるであろう高校生のレベルではかなり難しいと考えられる。ドイツ語keine Lust habenという表現は、そもそも根拠(Grund)が存在しないのだという指摘があるが、少なくとも高校生の知識では理解できないと思われる。

問4 空欄に先立つ部分が反語疑問(～すればいいじゃない)と解釈できること、正答にも使われているsehenの意味(分かる)を知っていることが求められている。やや難易度が高かったかもしれない。

問5 ここまでの段階で本文の内容がおおまかに理解できていることが前提だが、①～③を丹念に読んで意味を取っていくと、どれもが本文の内容とは一致しないことが分かる。結果的に④を正答とするのだろうが、④が本当に「犬を飼うことができない理由」なのかどうか、会話文の行間を読んで疑問に感じた受験者もいたかもしれない。

第6問 最後は例年どおり長文読解の問題である。今年度のテーマは「旅」であり、受験者にとっては身近な題材である。注も量は適切であり、本文も、身近な具体例から始め、旅の歴史、そのことから導き出せる抽象的な概念へと発展し、1ページによくまとめあげられている。9問中7問の選択肢が日本語であり、これらが本文を理解する一助となっている。また、昨年も指摘させていただいたが、文章の内容理解や、設問への解答の鍵となる単語(今年の場合はS elbstbild)に注が付けられているので、それもまた問題を解く際の助けとなっているかもしれない。

問1 下線部④より前に書かれている具体例に一致する選択肢を選ぶ易しい問題。

問2 下線部④には、verlassenやauf den Weg machenなど、やや難しい表現があるので正確に読み取ることが難しかったかもしれない。また、選択肢は全てが接続詞indemというやや難しい単語を使っているため、苦勞した受験者も多かっただろうと想像される。aus… weggehenとverlassenがほぼ同義であることが分かれば解くことができる。

問3 直前で述べていることの言い換えであることが分かれば、比較的容易に答えが見付かる。選択肢も誤答であることが明白なものもあり、このくらい違いが明確に分かるのであれば、選択肢をドイツ語にすることも可能なのではないか。

問4 Fremden(fremd)という単語の意味が分かっているかどうかのポイントとなる。下線部④以降に具体例が三つ挙げられていて、その中の一つが選択肢の一つと明らかに一致している。

問5 下線部のmit Händen und Füßenが選択肢で身振り手振りと訳されてしまっているため、はじめから二つの候補に絞られる。そこからは一般常識でも正答を選ぶことができちゃう、解きやすい問題。

問6 下線部④には注の付いている単語が含まれており、理解度を問う問題としては疑問が残

る。Selbstbildの意味を含む選択肢は二つに絞られ、あとは前問同様一般常識で答えられる。

問7 問6で「自分の姿」がキーワードであることが分かるので、結果的にSpiegelの意味が分かっているかどうかだけが問われる問題となってしまった。

問8 四つの選択肢の中で、問6、7の答えと関連した内容を持つものが一つだけであることはある程度容易に判断できる。

問9 問6以降の流れで「自分の別の姿」「自分をよく知ること」が文章のテーマであることが分かっているため、「別の角度から眺める」「新しい自分」という語句を含む選択肢へと自然と導かれる。

3 分量・程度

(1) 分量について

ここ数年間大きな変化はない。ドイツ語単語の総語数は昨年比113語増、過去4年間で最も多かった。目立って増加した項目は第4問以下で、特に第4問は大幅に増加している。もちろん単語数の多寡はそのまま問題の難易度を現わすものではない。会話文も、長文読解の問題文も量という観点から見て適切であると評価したい。

(2) 程度について

単語の難易度についても問題は感じられなかった。受験者が使用した教材の種類によって身に付けている基本語彙に違いがあるという点を昨年は指摘したが、その観点から見ても今回は適切な単語選択が行われていると感じた。文法事項については、一部にやや高度なものが含まれているが、入学試験問題という性格から問題間にある程度の難易度が生ずるのは当然のことであるし、今回の問題については、許容範囲内に収まっていると考えている。

4 表現・形式

問題の表現や形式に関しては、一定の完成形に達したのではないだろうか。動詞や形容詞の活用に関連した出題が維持されている一方で、会話力を試す問題もバランス良く配置されている。さらに今後導入が予測されるものに、ドイツ語の問いにドイツ語で答える形式があるが、「次のドイツ語の問いにドイツ語で答えよ」といった区分でまとめて出題されるのであれば充分実現が可能であると考えている。またコミュニケーションを重視した外国語習得という観点から、以前には出題されていた値段や時刻の表現の問題が再び取り上げられてもよいのではないだろうか。

5 終わりに

昨年の平均点が一昨年のそれより若干上昇したにもかかわらず、受験者数がほぼ横ばいであった。依然として英語以外の外国語中最少の受験者数である。受験者がどのような理由からセンター入試の外国語科目でドイツ語を選んでいるのかは想像するしかないのだが、過去と現在とではそのあたりの事情が大きく変わっているような気がする。それは高等学校における英語以外の外国語の存在意義とも深く関わっていて、以前にも増して学校間の事情の違いが大きくなっているのではないかと感じている。その点では日本独文学会が昨年実施したアンケートの結果がある意味注目されるわけだが、高等学校各校はドイツ語授業にどのような価値を見出しているのか、どのような授業

計画に基づいて授業を行っているのかというような情報を集約した上で、新高等学校学習指導要領への対応を機にセンター試験のあるべき姿を模索することが課題となってきたのではないかと
思う。

昨年も述べさせていただいたが、高等学校でのドイツ語学習が多様化している状況に、センター試験の問題作成も的確に対応してきている。会話的要素を取り入れたり、挨拶や日常的な受け答えなどが出題されることも増えてきている。とはいえ、現在の「ドイツ語」の問題が、高等学校で習得したドイツ語能力を測る尺度としてどのくらい正しく機能しているのかを考えるといささか不安を感じてしまう。ただしこれには高等学校でドイツ語教育に携わっている教員の側にも原因がある。従来から高等学校学習指導要領の「英語に準ずる」という文言のもとで、各学校がそれぞれ独自のドイツ語教育を行ってきたことが、センター試験という一つの共通の基盤の上に作られた試験において、ドイツ語を学習した生徒にドイツ語での受験をためらわせる原因の一つとなっているのではないかと考えてならない。

高等学校教育は現在、教育目標の明確化、目標達成までの過程及び方法の明確化を要求されている。例えば英語の教育現場では、センター試験で一定の成果を上げられるようなカリキュラム、シラバスの作成・公開や、模擬試験・実力試験のような学習途中の様々な段階で生徒の学習の進捗状況をチェックするような指導を行っている学校も多い。そのような指導の場合、全国規模のデータが常に参照される。センター試験の科目として捉えた場合、ドイツ語にも同様の環境が求められているのではないかという見方もあながち考えすぎとは思えないところである。

センター試験がある意味、高等学校での学習成果を測る尺度としての機能を持っていることは、ドイツ語の場合においても例外ではない。その点から考えても、我々高等学校でのドイツ語教育に携わる者は、ある意味危機感を持って、センター試験「ドイツ語」のありようについて真剣に考えていく責務があると言わざるを得ない。